

【海外留学レポート】

ミッドキャリアとしての海外留学

-英国カーディフ大学博士課程への進学-

Studying Abroad in the Mid-Career: Entering the PhD Course of Cardiff University, UK

英国カーディフ大学社会科学部博士課程 森 純一

MORI Junichi

(PhD Candidate, School of Social Sciences, Cardiff University, UK)

キーワード：イギリス、大学院留学、ベトナム

博士号取得を目指してイギリスへ留学

私は某電機メーカーに勤務の後、米国タフツ大学フレッチャースクールにて修士号を取得し、国際開発の道へ進みました。国際連合工業開発機関（UNIDO）ベトナム事務所に勤務したのち、縁があり国際協力機構（JICA）が同じくベトナムにて実施する「ハノイ工業大学技能者育成支援プロジェクト」の専門家となりました。こうして近年は開発実務者として多くの時間を過ごしましたが、途上国での工業化および技能形成政策の改善に貢献するため、これまでの実務経験を一定の期間集中して理論的にまとめ自分の考えを検証したいと徐々に思うようになりました。そこで、JICA 専門家としての任期終了を契機に、思い切って博士課程への進学を目指すことにしました。

博士課程への進学を考えるにあたり、まず日本か海外かという選択肢がありました。修士課程修了後しばし政策研究大学院大学にて産業政策の研究員をしていたこともあり、日本の大学への在籍にも少し心が惹かれましたが、最終的には海外留学を決めました。その理由としては、まず、私の分野である技能形成・職業訓練に関する研究と政策に関しては、欧米諸国、特にイギリス、ドイツ、オーストラリアなどが世界的な潮流の形成に大きな影響力を持っているからです。日本に地理的に近い東南アジア諸国ですら、欧州流の技能形成・職業訓練モデルに傾倒している国が多く見られます。そのため、欧州、その中からたまたま知り合いから紹介してもらった数名の指導教官候補が所属していたイギリスの大学への留学を目指すことにしたのです。

留学計画を具体化するにあたり、大きな課題の一つは資金でした。海外留学は国内留学よりも費用

がかさみます。また、私のようにミッドキャリアで留学を目指す場合、年齢制限などから応募できる奨学金も限られてくるため、機会を見つけるのに苦慮しました。いろいろ探した結果、国際開発機構（FASID）の奨学金プログラムを見つけて応募したところ、運よく奨学生となることができました。同プログラムは私のように開発分野で実務経験を重ねた上で留学を目指すものにとって、本当にありがたいスキームでした。資金面の支援はもちろんのこと、日本のセミナーで発表する機会もいただき、同じ興味を持つ方々とネットワークを広げることもできました。

英国カーディフ大学への留学

留学先を決めるにあたって、ロンドン大学傘下の某教育系大学院、そしてカーディフ大学から入学許可をもらいました。双方ともに魅力的な点、気がかりになる点があり大分迷いましたが、最終的には指導教官の研究分野、熱意、人柄、さらには博士課程学生への個別のデスクの供与の有無などの研究環境を考え、カーディフ大学への入学を決めました。



カーディフ大学のメイン・ビルディング

イギリスの大学への入学は9月からが通常ですが、当時の仕事や家族の事情もあり、私は9月入学には間に合わず、入学許可を得た翌年の1月から入学しました。他の学生が9月から始めているなか、1月からほぼ一人で入学するのは何とも心細いものでしたが、幸い他の留学生と同じ指導教官についているイギリス人学生に助けられてなんとかついていくことができました。困ったときは、ためらわずに誰かに相談すれば、どこかに助けてくれる人がいるようです。

ところで皆様カーディフはご存知でしょうか？「イギリスに留学しています」というと、多くの方はなぜかロンドンにいると想像するようで、カーディフは日本ではそれほど知られていませんが、ウェールズの首都であるこぢんまりとした街です。ただ、土地柄ラグビーが盛んなため、ラグビーファンにはその象徴のミレニアムスタジアムとともに有名なようです。ロンドンなどの大都市とくらべると大分田舎であり刺激が少ない反面、親切な人が多い印象があり、また物価も比較的安く、寒くて雨

が多い冬を除いては住み心地の良い街です。緑も多く、大学のすぐそばにあるビュートパークの散歩は良い気分転換になりました。ちなみに、ビュートパークの横にあるカーディフ城には、2014年にオバマ元米国大統領が NATO 会議の折に来訪して夕食をとったそうです。ただ、ロンドンのように日本食レストランや日本人の経営する美容室などが多くあるということはなく、日本人の友人たちは、しばしば週末に息抜きにバスで3時間半ほどかけてロンドンに遊びに行っていました。



ビュートパークとタフ川

私の在籍するカーディフ大学は町の中心から歩いて10分ほどのところにあります。のんびりした街の雰囲気に合わせて、教授陣も比較的親しみやすい方々が多いのは私のような外国人留学生には助かります。私の指導教官は海外出張や自身の著書の執筆も多く多忙ですが、面談には意外と時間をとってくれます。また、時々パブに行ってビールを飲みながら話したりもします。この辺りも、忙しい首都から離れた大学の良いところなのかもしれません。また、以前は炭鉱産業などが盛んだった背景があるためか、労使関係、そして私の専門である技能形成や職業訓練を経済だけでなく社会学的な見地からを研究している教員が多くいるのも特徴です。

英国教育システムの特徴と米国との違い

イギリスの大学院に進んで、研究手法や研究倫理といったことにはかなり誇りを持ち、突き詰める傾向があると改めて感じました。私の在籍するカーディフ大学社会科学部でも、博士もしくは修士課程の1年目ではまず量的・質的な研究手法についてしっかり学びなおすことを要求されます。2年目以降はデータ収集、現地調査、論文執筆といった個別の活動が多くなりますが、大学全体の博士課程在籍者向けにさまざまな短期コースが用意されており、教育システムはしっかりしていると感じます。また、上述のように、カーディフ大学社会科学部では博士課程在籍者用に大きな研究部屋が確保され、基本的に各自それぞれ机、PC、文房具などがあてがわれましたので、研究室が他の学生との情報交換

の場となっていました¹。

一方で、修士号を取った米国と比べると、授業での教え方は米国の方が上手だという印象があります。米国の教授陣はいかに学生の興味を引くかといったことも含めて教えるプロであったのに対し、英国では知識は深くとも教え方にエンターテイメント性はあまりなく、また学部生への授業も、良くも悪くも常に教授が教えるのではなく、博士課程在学者が教えることが多くあります。この辺りは、少し徒弟制度の名残を感じるどころです。私としては、授業をとることの多い修士号は教えるプロの多い米国で、個人の活動が多くなる博士課程は研究手法と倫理に厳しい英国でといった選択肢は正解であったのではと考えていますが、どちらの国が良いかは研究分野や個人の好みによって変わるかもしれせん。

博士研究のテーマと進行状況

上述のような環境の中で、私はベトナムの技能形成についての博士研究を進めています。1990年初頭のドイモイ政策以降、ベトナムは増加する外国直接投資の恩恵を受けつつ経済発展と工業化を進めてきましたが、近年「中所得国の罠」に陥り成長が鈍化することが懸念されています。その要因の一つとして、しばしばスキルミスマッチ—十分な技術・技能を持つ人材の不足—が取り上げられています。しかし、多くの先行研究は、経済発展と工業化により高度なスキルを持つ人材需要が増加すると仮定し、スキル供給の問題に過度に注目しており、需要側の本質と制約を十分に考察していません。こうした背景で、私の研究は、企業・教育訓練機関・政府関係者とのインタビューから得た質的データに基づき、ベトナムの機械工業セクターにおける技能形成の現状と課題を需給両面から分析し、ベトナムを高スキル国に導き得る要素を探ることを目指しています。



日系金型メーカーで勤務する技能者

¹ ただし、2017年以降は博士課程在籍者が増えたため、机があるのは1年生と3年生だけになったようです。

博士研究の進め方は所属学部、そして研究テーマと手法によって異なりますが、私の場合は、博士課程の1年目は研究手法に関するコースを受講しつつ研究提案書と文献レビューの草稿を完成させ、2年目からベトナムにおける現地調査を始めました。現地調査の一部は指導教官が加わりましたが、ほとんどは自分で実施しました。ただ、なにせ研究資金の乏しい博士課程の学生ですから、旧職でお世話になった方々や現地の友人たちに大分お世話になりました。その後データの整理、分析、そして論文執筆をして現在に至ります。なかなか自分の思う通りに物事は進みませんが、学校による年間レビューがある意味良いプレッシャーを与えてくれています。進捗管理などのマネジメントシステムは、さすがに英国の大学は体系化されており積み重ねがあるなど感じるようです。また、指導教官からも定期的に課題を与えられます。もちろん指導教官の指導は厳しく、定期的な面談の後しばらく落ち込むことも多々あります。ただ、周りの学生に聞くと、大体みな同じ経験をしているようです。私よりも先に別の英国の大学で博士課程を終えてそのまま研究員として働く友人によると、厳しいコメントが多く、あまり褒めないのも英国式だそうです。

このように、日々さまざまなプレッシャーを感じながら、なんとか博士論文を早く提出したいと焦る毎日です。博士号を取得した暁に何をするかは未定ですが、できれば研究と開発実務を両立したいと考えています。これまで博士研究で得た知識を生かして、途上国における技能形成に関する政策提言や開発プロジェクトの実施にまた携わりたいという思いは強い一方で、政策提言につながるような研究もまた続けていきたいと思えます。日本の技術協力機関、国際機関、そして内外の大学も含めて、今のところは広く選択肢をもち、実務と研究の双方から今後も途上国の技能形成と工業化に貢献する道を模索しています。

今後留学を目指す方々へ

私は仕事、修士号、仕事、博士課程という道を歩んだため、ミッドキャリアで年齢も重ねてから海外の博士課程に進みました。こうした場合、その準備や資金繰りにも苦慮したのが実情ですが、あきらめずに探せば様々な選択肢があるとも思いました。また、英国でも博士課程の学生は比較的若い方が多いものの、私のようなミッドキャリアで始めた人たちもおり多様性があることも心地よく感じます。中には、定年退職してから博士課程を始めたような方もいます。また、なぜか同じ日本人同士でも、海外に出ると年齢の差は日本にいるほど気にならないようで、こちらのほうが率直な会話が可能になるようです。もちろん海外留学が常に最善ではなく、異文化での研究と生活には苦勞も多いですが、分野の最先端が海外にあるのであれば、そこに身を置いてみるのも一つの選択肢ではないでしょうか。